

# 国際日本研究センター

## International Center for Japanese Studies

# NEWSLETTER

東京外国語大学  
Oct. 2022 No. 31

### 国際日本研究センター第31号 目次

- ◆ 東アジア連続講演会「境界と路上を考える」特別企画  
沖縄「復帰」50年という問い…………… P.1
- ◆ 国立国語研究所・国際日本研究センター共同開催ワークショップ  
日本語・中国語・フランス語における渡来作物の方言…………… P.3
- ◆ 国際日本研究センター主催・東京海洋大学日本語研究室共催 特別講演会  
Echoes of English: European Anglicisms  
as Tokens of the Global Impact of English …………… P.5
- ◆ 東アジア連続講演会 第15回「境界と路上を考える」  
歴史のなかの朝鮮籍…………… P.6

東アジア連続講演会「境界と路上を考える」  
特別企画「沖縄「復帰」50年という問い」

国際日本研究センター

東京外国語大学  
国際日本研究センター比較日本文化部門 主催

**東アジア連続講演会**  
**境界と路上を考える**

■ 2022年6月11日～8月6日（全6回）14時から  
■ ZOOMにて（ZOOM ID: 847 0652 9757、PASS: 185358）  
■ 一般公開、お申し込み不要

1972年5月15日、沖縄は日本に「復帰」した。だが、日米間の施政権「返還」は、沖縄が「復帰」に託した抗議や問いかけを解消するどころか、問題をより複雑にした。以来半世紀、沖縄では軍事力の機能強化が格段に進み、日本による「包摂」と「排除」ともとまるところを知らない、「復帰」の現実と抗議した人々の声は、今日もいたるところに押し続けている。50年という時をふまえ、戦争と占領に対する沖縄の「いま」を考えたい。

◆ プログラム ◆

6月11日（土）戸邊 秀明氏 「復帰後史、その半世紀の意味」  
6月26日（日）佐喜眞 道夫氏 「沖縄という場所からアートを考える」  
7月9日（土）川満 昭広氏 × 上原 こずえ氏 「民衆の視点からの体験の継承と出版」  
7月23日（土）今 郁義氏 × ウェスリー 上運天氏 「コザ暴動が問いかけた「復帰」」  
7月24日（日）若林 千代氏 「戦争と米軍占領、そして今」  
8月6日（土）中野 敏男氏 「東アジアと沖縄」

【オンライン開催にあたってのお願い】  
・ミーティングルームは開始10分前に開室いたします。  
・入室の際は「本名」および「所属」を明記ください。

共催：真世宗研究室（琉球大学、teiji527@gmail.com）  
基盤研究（B）社会運動における生存権・生存思想の影響とその社会に関する基礎的研究（研究代表：友常勉）  
お問い合わせ先（国際日本研究センター） Tel: 042-330-5794 E-mail: info-icjs@tufs.ac.jp

特別企画

沖縄「復帰」50年という問い

表記のテーマにもとづいて、6回の連続講演会を開催した。そのうち7月23日と24日は琉球大学・沖縄大学を会場におこなった。

- ①6月11日 戸邊秀明氏  
「復帰後史、その半世紀の意味」
- ②6月26日 佐喜眞道夫氏  
「沖縄という場所からアートを考える」
- ③7月9日 川満昭広氏 × 上原こずえ氏  
「民衆の視点からの体験の継承と出版」
- ④7月23日 今郁義氏 × ウェスリー上運天氏  
「コザ暴動が問いかけた「復帰」」
- ⑤7月24日 若林千代氏「戦争と米軍占領、そして今」
- ⑥8月6日 中野敏男氏「東アジアと沖縄」

戸邊秀明氏は、皮きりの講演にふさわしく、米軍統治期・復帰後前期・復帰後後期という時期区分と、その区切りを記しづける72年の「復帰」、95年の少女暴行事件をきっかけとした反基地運動という把握を踏まえて、沖縄の社会がもう一段作り変えられていく「沖縄問題」のありかを示した。「沖縄イニシアティブ」といったスローガンを通して沖縄の運動が、新しい支配の様式としての政治、経済、文化の変化によって封じ込められていったこと、そして2010年代の安倍内閣の長期政権に対してオール沖縄で対抗していくという対抗軸から現在に至る歴史過程と抗争によって、「復帰」50年を把握する見通しが提示されたわけである。

続く佐喜眞道夫氏は、佐喜眞美術館館長である。宜野湾市に位置する佐喜眞美術館は、一部返還された普天間飛行場の跡地に、1994年に開館した。普天間飛行場を望むことができる屋上を有するこの美術館は、丸木位里・俊による「沖縄戦の図」を常設展示として、沖縄作家を中心にした気骨あふれる企画展で知られている。講演では、鍼灸師をつづけながら美術館を準備し、今や沖縄文化運動の一角を担っている佐喜眞館長から、美術館開館までの経過と現在の活動が紹介された。

現在、インパクト出版会を主宰している川満氏は、地域史にもとづく沖縄戦史の詳細な検討、日米ガイドラインなどのアメリカのアジア戦略の分析を通して、2000年代初期を日本の軍事化における重要な転機としてみる。そして本学教員の上原こずえ氏からは、川満氏の聞き役を担い、川満氏のたぐいまれな出版活動を紹介しながら、上原氏自身が2004年に発生した沖縄国際大学での米軍ヘリ墜落事件と出会い、金武湾闘争の研究を進めてきたこと、それらを踏まえて沖縄戦という経験を教訓化した住民運動を研究対象としていることが話された。そしてまたそうした住民運動が、川満氏の出版活動と重なっていることが指摘された。

今郁義氏は、1970年12月20日の末明のコザ暴動に居合せた。そしてその後、暴動の検証をすすめてきた今郁義は、暴動そのものが、あたかも暴動の後見を組織的な社会運動に託すかのような作風を持っていたと語る。これまでコザ暴動神話として語られていた、黒人兵士の車には暴行を加えず見逃したことが事実であ

ると判明したことなどの新発見の紹介もまじえ、1970年代から2000年代までの戦後史のなかで、〈日本〉と対峙してきた沖縄の思想・社会運動について語られた。

サンフランシスコ州立大学（SFSU）でエスニック・スタディーズの教員として沖縄研究に従事しているウェスリー氏は、エスニック・スタディーズ学部設立を要求して全米最長のストライキを実行したSFSUの歴史や、ウチナンチュ三世としての生い立ちと経験を踏まえて、三線を通じた文化運動や批判的日系研究を組織し、「モデル・マイノリティ」という日系人像を批判する現在の研究までの歩みを語った。

若林千代氏は、COVID-19下の抑圧状況と沖縄で戦争を語ることに對する閉塞感との重なりという個人的な経験から「アセンブリ・コレクティブ」の「知」を取り戻す必要と、そうした実践例としてヴィジュアル・アーティストの山城知佳子の連作「肉屋の女」や、戦火のウクライナと沖縄戦を重ねる短歌を紹介、そして現代の戦争研究のなかでの沖縄の地政学的かつ軍事的な系譜をたどられた。政治学としてのディシプリンを生かしながら、みずからの体験的で実存主義的な投企をさしはさむ刺激的な講演であった。

全体のまとめを担った中野敏男氏は、まず近代植民地帝国主義を定義し、そこに沖縄の地政学を位置付けつつ、そこに森崎和江の「共働の原理」を導入することで、反復帰論と反植民地主義の思想闘争をときほぐしながら——さらに1998年に沖縄で開催した「東アジアの冷戦」をめぐるシンポジウムの蓄積を踏まえつつ——、東アジア諸地域のなかで継続する／連携する植民地主義に抗していく営為の必要性を語った。中野氏の専門領域でもあるマックス・ウェーバーの理解社会学における行為と社会構造との連関の方法論も想起される方法論で、中野思想史のひとつの提示でもあっただろう。

政治史的過程に力点を置いた昨年の東アジア連続講演会に対して、今回は文化運動に焦点をあてたことと、沖縄において2回の講演会を開催したことに意味がある。私たちのプロジェクトを、沖縄の地政学のなかでの緊張感にさらしながら、生きた対話のなかで「復帰」50年を再考することができたと考える。ご協力いただいた講師のみなさんと運営にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。なお常時50名前後の参加があり、毎回盛況であったことも報告しておきたい。

（友常勉）

East Asian Lecture Series "Thinking about Boundaries and Roads"  
Special Program "Question of 50 years after the 'Return' of Okinawa"

Six consecutive lectures were held based on the theme.

In the first lecture, Mr. Tobe Hideaki presented the "Okinawa problem" in which Okinawan society has been reshaped based on the period of U.S. military rule, the early period and the late period after the return. He explained the "return" in 1972 and the anti-base movement triggered by the rape of a girl by American soldiers in 1995, which periodize Okinawa's post-war history. By the slogan of the "Okinawa Initiative", movements in Okinawa have been oppressed by political, economic and cultural changes which are new

forms of control. On the other hand, "all Okinawa" opposed the Abe administration in the 2010s. The prospect of a 50-year "return" was presented through this historical process and strife to the present.

Mr. Sakima Michio, the next presenter, is the director of the Sakima Museum of Art. The Sakima Art Museum, located in Ginowan City, opened in 1994 on the site of the partially returned Marine Corps Air Station Futenma. The museum, which has a roof with a view of Marine Corps Air Station Futenma, is known for its energetic special exhibitions centred on Okinawan artists. Moreover, Maruki Iri and Shun's "Map of the Battle of Okinawa" is there as a permanent exhibition. In the lecture, Mr. Sakima, who has prepared the museum while continuing to work as a practitioner of acupuncture and moxibustion, and is now a part of the Okinawan cultural movement, introduced the history of the museum and its current activities.

Mr. Kawamitsu Akihiro, who currently presides over Inpacuto shuppankai (Impact Publishing), looks at the early 2000s as an important turning point in Japan's militarization, through a detailed examination of Okinawa's military history based on regional history methodology and an analysis of American strategies on Asia such as U.S.-Japan guidelines. Dr. Uehara Kozue, a professor at the Tokyo University of Foreign Studies, interviewed Mr. Kawamitsu and introduced Kawamitsu's extraordinary publishing activities. She herself encountered the crashing of a U.S. military helicopter at Okinawa International University in 2004, and proceeded with research on the Kin Bay Conflict. Based on these experiences, she explained that her research targets are residents' movements that have taken lessons from the experiences of the Battle of Okinawa into account. It was also pointed out that such residents' movements overlapped with Mr. Kawamitsu's publishing activities.

Mr. Kon Ikuyoshi encountered the Koza riots in the early hours of the December 20, 1970. Mr. Ima, who has been examining the riots since then, says that the riots had been narrated in such a way of entrusting the riots to organized social movements. He introduced new facts that have been told as myths of the Koza Riots such as the story that the cars of black soldiers were overlooked without assault. He talked about the ideology and social movements in Okinawa that confronted "Japan" in the postwar history from the 1970s to the 2000s.

Mr. Wesley Ueunten is a professor of ethnic Studies at San Francisco State University (SFSU), specializing in Okinawa studies. He presented the history of SFSU, which carried out the nation's longest strike for the establishment of an ethnic studies department. He also talked about how he organized a cultural movement through the Sanshin and critical Japanese-minorities research based on his background and experience as a third generation of Uchinanchu. Thus, he explained his research till today, which criticize the image of Japanese-American minorities, as a "model minority".

Wakabayashi Chiyo introduced the need to regain the "knowledge" of "Assembly Collective" from her personal experience of the overlap between the suppressive situation during the COVID-19 crisis and the sense of stagnation of talking about war in Okinawa. For



examples, she introduced visual artist Yamashiro Chikako's serial work "the woman of the Butcher Shop", and tanka that overlaps the Ukraine War and Okinawa War. She also traced a geopolitical and military genealogy of Okinawa in part of today's war research. It was a stimulating lecture that incorporated her own experiential and existentialist project while making use of the discipline of political science.

Mr. Toshio Nakano, who was in charge of the overall summarization, first defined modern colonial imperialism and positioned Okinawa's geopolitics, and then introduced Morisaki Kazue's "principle of co-operation" to it. While loosening the ideological struggle of anti-return and anti-colonialism, he took into account the accumulation of the symposium on the Cold War in East Asia held in Okinawa in 1998. Through them, he spoke of the necessity of continuing and coordinated efforts to resist colonialism in East Asia. The methodology of Max Weber's interpretive sociology, which is Nakano's specialty, is the methodology to understand the relationship between action and social structure. This methodology was observable in this presentation, and so this presentation was a presentation of Nakano's understanding of history of thought.

It was meaningful to focus on cultural movements and to hold two lectures in Okinawa. While exposing our project to the tension in the geopolitics of Okinawa, we believe that we were able to reconsider the 50 years after the "return" of Okinawa in a living dialog.

国立国語研究所「空間接続」プロジェクト対照日本語部門第36回『外国語と日本語との対照言語学的研究』共同開催WS  
日本語・中国語・フランス語における渡来作物の方言

東京外国語大学・国際日本研究センター  
対照日本語部門 第36回『外国語と日本語との対照言語学的研究』  
国立国語研究所「空間接続」プロジェクト

**共同開催ワークショップ**  
**「日本語・中国語・フランス語における渡来作物の方言」**

**2022年9月17日(土) 13:30 ~ 16:00**  
ZOOMにて<<一般公開、お申し込み必要>>

\*\*\*\*\* PROGRAM \*\*\*\*\*

13:30 ~ 14:10  
**大西拓一郎氏** (国立国語研究所教授、専門：日本語方言学、言語地理学)

14:10 ~ 14:50  
**鈴木史己氏** (南山大学外国語学部アジア学科准教授、専門：漢語方言地理学、漢語語彙史)

14:50 ~ 15:30  
**川口裕司氏** (東京外国語大学大学院教授、専門：フランス語学、フランス方言学)

15:35 ~ 16:00 **質疑応答**

\*\*\*\*\*

◆ 事前申し込み方法 ◆  
以下のリンク先またはQRコードより事前申し込みをお願いします。  
<https://forms.gle/7iyA3H33LyGa92Fa8> 締め切り：9月16日(金) 12時まで。

事前申し込みをされた方に、講演会の前日(9月16日)、ZOOMリンクと案内文を送信する予定です。

対照日本語部門 各口番子 教員代表 大西拓一郎 川口裕司 鈴木史己 三宅隆之 山田洋平 中野真実  
お問い合わせ先(国際日本研究センター) tel:042-330-5794 / mail:info-icjs@tufs.ac.jp

2022年9月17日(土) 14:00 ~ 17:50 (オンライン開催)  
発表者：大西拓一郎氏(国立国語研究所教授、専門：日本語方言学、言語地理学)、鈴木史己氏(南山大学准教授、専門：漢語方言地理学、漢語語彙史)、川口裕司氏(東京外国語大学大学院教授、

専門：フランス語学、トルコ語学、言語学)

発表の概要は以下のとおりである。

● 大西拓一郎氏「日本語における渡来作物の方言」

はじめに国立国語研究所「空間接続」プロジェクトの概要について大西氏より説明があった。方言情報には場所情報が不可欠であり、言語資源の空間的な関係を示した代表的なものとしては言語地図がある。本プロジェクトでは国語研究所所蔵の海外言語地図のデータベースや画像公開を行っている。また、古典籍に現れる地名への位置情報の付与や古方言辞書『物類称呼』(江戸時代後期作成)のデータベース化も行い、言語地理学を中心課題として月一回オンライン研究会を開催しているとのことであった。

続いて、日本語の渡来作物の方言についての研究発表が行われた。「渡来作物」とは佐藤亮一(1977)による命名であり、大航海時代にヨーロッパ人がアメリカ大陸から持ち帰り、世界各地に広まった作物(サツマイモ、ジャガイモ、カボチャ、トウモロコシ、トウガラシなど)を指す。方言語彙の特色としては、外来語や固有名詞(地名、人名)起源の語が多い点が上げられる。但し、外来語そのままが使われるのではなく類音牽引による保持、固定化されるものが見られる。例えば、「カボチャ」は‘abobora’(ポルトガル語で瓜を指す)からであるが、類音牽引(非義性類音牽引)によりもともと存在していたボーフラ(蚊の幼虫)に引き付けられて西日本に広まったとする。また、固有名詞の中でも地名のついたものはその地名の場所から離れたところで分布する傾向がある(例えば「キュウシュウイモ」(サツマイモ)が中国地方や和歌山に分布するなど)。一方で、人名の場合は、その人物ゆかりの地に分布する(例：甲州の代官「中井清太夫」が飢饉対策のために九州からジャガイモを取り寄せ広めることで飢饉から人々を救ったことから、ジャガイモに「清太夫」という名がつけられている)。

● 鈴木史己氏「中国語における渡来作物の方言」

新来事物は、伝来当初は語形と物が一緒に伝播し、密着度が高まると独自の語形が生まれることが多いと先行研究にある(岩田礼(1995))。中国語の渡来作物の方言分布には、伝来、食用化、栽培化の時期のずれや、作物そのものの伝播経路が反映されている。

渡来作物を表す語の構成と分布は大きく以下の2種類に分けられる。1つは、既存語形に修飾成分を付加する援用方式(例：山芋(サツマイモ)/洋山芋(ジャガイモ))で、渡来作物と在来作物との呼称の分布が重なる特徴がある。もう1つは、既存語形をそのまま自らのものにする転用方式であり、同音衝突を回避するために語形に操作を加えることがある(例：山薬(ナガイモ)→山薬(ジャガイモ)/長山薬(ナガイモ))。援用形式・転用形式ともに、当該語形は語彙体系に組み込まれているといえる。

● 川口裕司氏「フランス語における渡来作物の方言 ジャガイモ・サツマイモ・トウモロコシ」

ジャガイモとサツマイモの命名がどのように定着してきたかという点がフランス語の中では重要である。ジャガイモは、1526

年スペインのアピラで栽培されており、1532 年 ピサロがヨーロッパに持ち込んだという記録がある。また、ガスパール・ボアンがフランスとドイツの国境都市バーゼルで potato と呼ばれるジャガイモを栽培していたという記録がある (1596)。フランスにはスイスからフランシュ・コンテ地方経由で導入されたと言われている (Roze 1898)。

現在、フランス語で使われているジャガイモの表現 'pomme de terre' は、ラテン語 MALUM TERRAE の語源に由来し、近代フランス語になってから定着したが、もともとはジャガイモとは別のものを指していた (食用の塊茎 (1240)、マンダラゲの根、シクラメンの球根 (15-16 世紀)、キクイモ (1655))。

ジャガイモは Cartoufle と呼ばれ、truffes に似ていて、スイスからドフィネ地方に入ってきた (オリビエ・ドゥ・セール 1539-1619) という記録がある。さらに、ディドロ、ダランベール百科全書 (1779) の記録を加えると、ジャガイモは pomme de terre、Patate、Cartoufle、truffe という 4 種類の名称が存在していることがわかる。それらの名称は地域によって広がり異なり、Patate は西部海岸沿い、pomme de terre はパリ起源、toruffe はリヨン地方、南仏に分布が異なる (レオ・シュピッツァ (1912))。

ジャガイモは長い間食用にはならず、ジャガイモとキクイモ (topinambour) との混同や Patate(douce) サツマイモとの混同が考えられる。アカデミー辞書によると、ジャガイモは potato (1596) → patate (1798) → と移り、1835 以後 pomme de terre の形態が増加しているが、pomme de terre が定着してからも民衆は話し言葉でジャガイモを patate と呼んでいたことから、話し言葉と書き言葉の区別もふまえて今後分析を進める必要がある。

\* \* \*

人々の生活の中で身近な渡来作物に関して、日本、中国、フランスの 3 地域における音声・文法要素・語彙等の地理的分布や歴史的変遷を大変興味深く伺った。膨大な資料をもとに時間と労力をかけて研鑽されている各氏の研究の蓄積を垣間見ることができた。それと同時に指示物と呼称の認定の難しさを痛感した。時代ごとの社会情勢と渡来作物の呼称の変化を関連付けた社会言語学的研究においても貴重なりソースとなり得ると感じた。領域を超えた様々な研究の可能性が感じられる有意義なワークショップであり、オンライン会場には常時 40 名近くの聴衆が参加し、ヨーロッパ言語の研究者からの質問や追加情報も出て盛況であった。

(谷口龍子)

National Institute for Japanese Language and Linguistics' "Connecting Space" Project: Section of Contrastive Japanese, the 36th Joint Workshop on "Contrastive Linguistics Research between foreign languages and Japanese language" 17/9/2022 Sat. 14:00 – 17:50 (Zoom online)

Presenters: Onishi Takuichiro, Professor of National Institute for Japanese Language and Linguistics, specialises in Japanese dialectology and linguistic geography. Suzuki Fumiki, Associate Professor of Nanzan University, specialises in Chinese dialect geography and Chinese vocabulary history. Kawaguchi Yuji, Professor of Tokyo University of Foreign Studies, specialises in French linguistics, Turkish linguistics and linguistics.

I (Taniguchi) learnt about the geographical distribution and historical transitions of sound and vocabulary in the three regions of Japan, China, and France regarding the imported crops that are familiar to people in their daily lives.

"The dialect of imported crops in Japanese" by Professor Takuichiro Onishi

"Torai sakumotsu" (imported crops) is the name given by Sato Ryuchi (1977). It refers to the crop that was brought back by Europeans from the Americas during the Age of Great Navigations and spread throughout the world, such as sweet potatoes, potatoes, pumpkin, corn, and peppers. The characteristic of their dialectal vocabularies is that many words originate from foreign words or proper nouns such as place names and names of people. Some of those words are preserved under the influence of similar familiar sounds. On the other hand, in the case of a person's name, it is distributed in the place related to the person.

"The dialect of imported crops in Chinese," by Professor Suzuki Fumiki

The dialect distribution of imported crops in Chinese reflects the timing of their introduction, making it edible, and cultivation, as well as the routes of the crops' spread.

The composition and distribution of terms for imported crops can be roughly divided into the following two types. The first is the incorporation method, in which modifier components are added to the existing word form. Its feature is that the distribution of the names of imported crops and native crops overlaps. The other is the diversion method, which reuse existing phonetic forms. Sometimes it manipulates the phonetic forms to avoid homonymic clash. It can be said that in both the incorporation method and diversion method, word forms are incorporated into the vocabulary system.

"The dialect of imported crops in French: Potatoes, sweet potatoes, and corn" by Professor Yuji Kawaguchi

How the names of potatoes and sweet potatoes have been established is important in French. The current French potato expression, 'pomme de terre', is derived from the Latin word malum terrae, but originally meant something different from the potato.

Several sources indicate that there are four different names for potatoes: pomme de terre, patate, cartoufle, and truffe.

The potato may be confused with topinambour and patate (douce). According to the Academy Dictionary, potatoes moved from potato (1596) to patate (1798) to potato (1798), and the form of pomme de terre has increased since 1835.

(Taniguchi Ryuko)

国際日本研究センター主催・東京海洋大学日本語研究室共催

## 特別講演会

Echos of English: European Anglicisms  
as Tokens of the Global Impact of English

**PROF. HENRIK GOTTLIEB**  
特別講演

**ECHOES OF ENGLISH: EUROPEAN ANGLICISMS AS TOKENS OF THE GLOBAL IMPACT OF ENGLISH**

**9月27日(火) 16:00~18:00**  
東京外国語大学アゴラ・グローバル・プロジェクトスペース  
(一般公開・ハイブリッド開催(要申し込み))

◆ 16:00~16:10 今村圭介 (東京海洋大学)  
「GLAD(Global Anglicism Database)プロジェクトと英語借用の多言語比較研究の可能性—日本語研究の視点から」

◆ 16:10~17:40 Henrik Gottlieb  
(University of Copenhagen)  
「Echos of English: European Anglicisms as tokens of the global impact of English」

◆ 17:40~18:00 Questions & Answers

※ 当日の講演は英語で行われますが、質疑応答は日本語も可能です。  
※ 参加をご希望の方は以下のリンク先またはQRコードからお申し込みください。  
<https://forms.gle/SCByZzabhl12NlBndY9>  
申込締め切り: 2022年9月25日(日)

※ 新型コロナウイルス感染状況によりオンラインのみでの開催に変更する場合があります。

【お問い合わせ先】 東京外国語大学国際日本研究センター Tel) 042-330-5794, E-mail) info-icj@tufs.ac.jp

2022年9月27日(火)に「Prof. Henrik Gottlieb 特別講演」が東京海洋大学日本語研究室との共催で開催された。講演会では、まず今村圭介氏(東京海洋大学:日本語学)が講演者とともに作成に関わったGLADデータベースの概要と、データベースを用いた研究の可能性について発表を行った。その後に、Henrik Gottlieb氏(コペンハーゲン大学名誉教授:翻訳論、接触言語論)がデンマーク語を中心とした、ヨーロッパ言語における英語借用の増加に関する講演を行った。概要は以下のとおりである。

● 今村圭介氏「GLAD(Global Anglicism Database)プロジェクトと英語借用の多言語比較研究の可能性—日本語研究の視点から」

日本語における英語借用は外来語研究として従来から高い関心を集め、多くの研究が行われてきた。しかし、それらの外来語研究は、日本語のみに着目した研究がほとんどであり、グローバルレベルの英語の影響として分析されることがほとんどなかった。そのような中で近年、多言語比較研究を促進するために、英語借用のデータベース作成を行うプロジェクト Global Anglicism Database(以下、GLAD)が始まった。発表では、GLADデータベースに収録されている言語、収録されている借用のタイプ、データベース収録の基準などについて説明があった。また、GLADデータベースを用いた研究として、pseudo-Anglicism(擬似英語借用語、和製英語と近似概念)の対照研究が紹介された。データベースとコーパスを使った調査の結果、pseudo-Anglicismは日本語において圧倒的に数が多く、使用頻度が高いことが示された。今後、データベースを用いて対照研究を進めることで、現代における英語借用の影響の度合いや、各言語間の違いを形成する要因が明らかにされることが期待される。

● Henrik Gottlieb氏「Echoes of English: European Anglicisms as tokens of the global impact of English」

ヨーロッパ言語は、特に戦後に借用という形で英語の影響を強く受けてきた。デンマークを含むヨーロッパの一部では、英語はEFL(外国語としての英語)からESL(第二言語としての英語)に位置付けを変えつつあり、各言語に対する英語の影響はさらに強まっている。本講演では、まず、その様な現状に対して、「英語は語彙が豊富」という間違った言説が存在することについて言及した後に、Anglicism(英語からの借用)とは何か、定義の詳細な検討が行われた。英語借用が起こる原因には、直接的な英語との接触と間接的な英語との接触が見られるが、マスメディアやソーシャルメディア、また映画の吹き替えや字幕などの翻訳を通して間接的に接する英語が、現在多くの言語で借用源となっている。借用には、見える形の借用(visible Anglicism)に限らず、見えない形の借用(invisible Anglicism)も多く見られる。見えない形の借用の例として、同根語が英語の影響から新たな意味を獲得する「意味借用」、英語の語構成をモデルに本来語を組み合わせた「翻訳借用」、イディオムや諺の直訳、英語に似た構造の文の使用増加が見られる。そのような様々な英語借用の例として、過去30年間でtænker at ...[think that ...], grønne omstilling [green revolution], okayがデンマーク語で増加していること、また、Med hensyn til ('when it comes to ...')という従来表現が、いかに英語に影響された表現、Når det kommer tilに置き換えられているかがコーパス調査によって示された。さらには、若者の間では英語へのコードスイッチングが増加している点や、子供の命名にも英語の影響が強まっていることが示された。

\* \* \*

講演の後には質疑応答が行われ、学内外からの参加者から多くの質問が出て、活発な議論が行われた。(伊集院郁子・今村圭介)

Special Lecture 2022 sponsored by the International Centre for Japanese Studies and co-sponsored by the Japanese Language Laboratory of Tokyo University of Marine Science and Technology  
Special Lecture of Professor Henrik Gottlieb  
September 27, 2022 (Tue) 16:00-18:00

"Professor. Henrik Gottlieb Special Lecture" was held on September 27 2022 in collaboration with the Japanese Language Laboratory, Tokyo University of Marine Science and Technology. At the lecture, Imamura Keisuke (Tokyo University of Marine Science and Technology: Japanese Linguistics) conducted a presentation on the GLAD database he was involved in with the lecturer. Later, Henrik Gottlieb (Professor Emeritus, University of Copenhagen: Translation and Contact Linguistics) gave a lecture on the increase in borrowing of English in European languages, especially Danish.

"The GLAD (Global Anglicism Database) Project and the possibility of Multilingual Comparative Research using English borrowed from the Perspective of Japanese Studies" by Professor Keisuke Imamura

To promote multilingual comparative research, the Global Anglicism Database (hereafter, GLAD), a project to create a database of loan-



words from English, has started. In the presentation, the languages and the types of loanwords included in the GLAD database, and the criteria for inclusion in the database were explained. As research using the GLAD database, a comparative study of pseudo-Anglicism (pseudo-English loanwords, Wasei-eigo and its approximate concept) was introduced, and the possibility of future research development was shown.

"Echoes of English: European anglicisms as tokens of the global impact of English" by Professor Henrik Gottlieb

European languages have been heavily influenced by English, especially after World War II, in the form of borrowing. In parts of Europe, including Denmark, English is moving from EFL (English as a foreign language) to ESL (English as a second language), and the influence of English on each language is increasing. The lecture began with a detailed review of such a situation and the definition of Anglicism (borrowing from English). He then showed how Anglicism came into each language from a variety of mediums and typologies, along with a wealth of examples of Danish. In addition, the corpus study showed data to visualise such language changes by English.

(Ijuin Ikuko and Imamura Keisuke)

## 東アジア連続講演会 第15回「境界と路上を考える」 「歴史のなかの朝鮮籍」

**歴史のなかの**  
**東アジア連続講演会 第15回**  
**境界と路上を考える**  
**歴史のなかの朝鮮籍**

講師：鄭 榮桓（明治学院大学）

明治学院大学教養教育センター教授。専門は朝鮮近現代史・在日朝鮮人史。著書に『歴史のなかの朝鮮籍』（以文社、2022年）のほか『朝鮮独立への隘路：在日朝鮮人の解放五年史』（法政大学出版局、2013年）や『忘却のための「和解」：『帝国の慰安婦』と日本の責任』（世織書房、2016年）がある。

日時：2022年10月1日（土）14時から  
会場：オンライン（ZOOM）

本講演会は一般公開となりますが、参加には事前のお申し込みが必要です。以下のURLまたはQRコードよりお申し込みをお願いいたします。申込締切：9月30日（金）12時まで

<https://forms.gle/GqKfK8X37j3Fdn7>  
お申し込みをされた方に9月30日にメールにて、ZOOMミーティングに関するご案内を送信いたします。

国際日本研究センター  
（主催）国際日本研究センター比較日本文化部門  
（共催）国際日本研究センター比較日本文化部門  
基盤研究（B）社会運動における生存権・生存思想の影響とその社会に関する基礎的研究（研究代表：友常勉）  
お問い合わせ先（国際日本研究センター） TEL: 042-330-5794 Email: info-icjs@tufs.ac.jp

10月1日に上記の講演会が開催された。講師の鄭氏は明治学院大学教養教育センター教授。専門は朝鮮近現代史・在日朝鮮人史で、著書に『歴史のなかの朝鮮籍』（以文社、2022年）のほか『朝鮮独立への隘路：在日朝鮮人の解放五年史』（法政大学出版局、2013年）や『忘却のための「和解」：『帝国の慰安婦』と日本の責任』（世織書房、2016年）がある。

講演会では、『歴史のなかの朝鮮籍』にもとづいて、植民地期在日朝鮮人支配の法的構造が敗戦後日本の外国人法制に再編され

る過程に朝鮮籍を位置付け、1952年の対日平和条約発効後も外登法上の国籍「朝鮮籍」が残った理由を考え、そして平和条約発効から1965年の日韓法的地位協定をへて、協定永住申請期間終了までのあいだ、朝鮮籍について日本政府と在日朝鮮人団体がどのように理解していたかを明らかにすること、が話された。

朝鮮戦争時の日韓会談では、両政府は平和条約後の朝鮮人の国籍を一律に韓国とすることで合意したが、朝鮮半島分断を固定する日本政府の立場は、韓国政府を支持しない在日朝鮮人たちの反対運動に直面する。朝鮮籍の含意には、朝鮮民主主義人民共和国の意味と、統一された朝鮮（一国二政府）の意味とが存在し、韓国国籍強要反対の共同戦線が形成された。そこで日本政府は朝鮮籍の継続記載を認めることとなった。日韓条約の締結は「大韓民国」に限り永住権申請を認め、外登法上は国籍「韓国」のみが真実の国籍を示すとの見解を日本政府は発表する。これに反対する大衆運動は韓国国籍者に朝鮮籍へ書き換えを求め、法務省の国籍事務の修正を引き出した。今日において、国籍欄の記載は依然として南北の支持如何を示す指標として認識されている。他方、韓国政府も朝鮮籍者は朝鮮民主主義人民共和国を支持し、韓国籍を拒否している者とみなしてきた。それゆえ朝鮮籍のままでは韓国との往来が制約される状況があり、これをめぐって朝鮮籍旅行者の旅行証明書発給の不許可の取り消しを求める裁判も争われてきた。

朝鮮籍者に対する処遇の根本的な変更がなされていない現在、朝鮮籍者にとっての「国籍」維持について、鄭氏はそれを「錨」としての朝鮮籍と呼ぶ。朝鮮籍者は三万人弱存在する。その国籍には南北分断の歴史が刻印されている。朝鮮籍とは、この分断状況のなかで自らの尊厳を守るための「錨」ではないか、それゆえ朝鮮籍を手放さないのだと主張するのである。討論では、朝鮮籍という問題を市民権＝シチズンシップやデニズンシップなどの議論を介して論じること、1980年代国際法を経験した日本政府と移民政策など、刺激的なやりとりが交わされた。参加者は38名であった。

（友常勉）

East Asian Continuous Lecture " Thinking about Boundaries and Roads" October 1: Chong Young-hwan "Korean Citizenship in History"

Mr. Chong is a professor at the liberal arts education centre of Meiji Gakuin University. He specializes in the modern history of Korea and the history of Zainichi (Koreans in Japan). His books include *Rekishi no nakano chosenseki* (Korean Citizenship in History), (Ibunsha, 2022), *Chosen dokuritsu no airo: zainichi chosenshin no kaiho gonenshi* (Narrow Path toward Korean Independence: Five years of the Liberation of Koreans in Japan) (Hosei University Press, 2013), and *Bokyaku notameno "wakai": Teikoku no ianfu to Nihon no sekinin* (Reconciliation for Oblivion: Teikoku no ianfu and Japan's Responsibilities) (Seori Shobo, 2016).

In the lecture, based on "Korean Citizenship in History", Korean citizenship was positioned in the process of restructuring the legal

structure of the colonial rule of Koreans in Japan into Japan's foreign law after the defeat in World War II. The reason why "Korean Citizenship" remained under the foreign law even after the entry into force of the Peace Treaty with Japan in 1952 was also explained. He clarified how the Japanese government and organizations of Koreans in Japan understood Korean citizenship from the Peace Treaty to the Legal Pact between Japan and Korea till the end of the permanent

residence application. There has been no fundamental change in the treatment of Korean nationals, and Mr. Chong refers to the maintenance of "nationality" for Korean nationals as "anchors." There are about 30,000 Korean residents. Its nationality is inscribed with the history of the division of North and South Korea. He argues that Korean citizenship is an "anchor" to protect one's dignity in this divided situation, and therefore does not let go of Korean citizenship.

## 今後の活動予定

### Screening and Q&A with the director

Bem-Vindos de novo (Welcome Back, Farewell)

Marcos Yoshi, Brazil 2021, 105min.

2022 年 11 月 25 日 (金) 17:30 ~

東京外国語大学府中キャンパス研究講義棟 226 教室

### トークセッション

Marcos Yoshi (本作監督) × Pablo Moreno (東京外国語大学)

### オーガナイザー

Iris Haukamp (東京外国語大学)

### 後援

TUFS Cinema

## 固有時との対話 沖縄・基地・Home

与那覇大智展 × 講演会

### 展示期間・会場

2022 年 12 月 5 日 (月) ~ 16 日 (金) 10:00 ~ 19:00

東京外国語大学府中キャンパス研究講義棟 1F ガレリア

### 講演会

与那覇大智 + 小沢節子

2022 年 12 月 16 日 (金) 17:30 ~

東京外国語大学府中キャンパス研究講義棟 103 教室

### 共催

比較日本文化部門

基盤研究 (B) 社会運動における生存権・生存思想の影響とその社会に関する基礎的研究 (研究代表: 友常勉)

## 『外国語と日本語との対照言語学的研究』

### 第 37 回研究会

2022 年 12 月 12 日 (土) 14:00 ~ 17:50

オンライン開催 (要事前申込)

### 報告

岩崎加奈絵

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

「ハワイ語の空間ダイクシス (仮)」

### 安達真弓

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

「ダイクシス表現としてのベトナム語指示詞:

空間・時間・人称・談話」

### 澤田淳

(青山学院大学)

「日本語ダイクシスの歴史:

直示動詞、敬語、指示詞を中心に」

### 主催

対照日本語部門

\* \* \*

※詳細および最新の情報は、国際日本研究センターホームページの「イベント情報」にてご案内しております。

下記の URL にてご覧いただけます。

QR コードからもアクセスできます。

発行: 東京外国語大学国際日本研究センター

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラグローバル 2F

TEL 042-330-5794 Email info-icjs@tufs.ac.jp

ウェブサイト URL <http://www.tufs.ac.jp/icjs/>

